

1. テーマ設定の理由

1970年代に高齢人口が7%となり、「高齢化社会」に入ったと言われ始めたころから、この問題が注目され始めて、それからは非常に早いスピードで高齢化が進み、2007年には高齢化率が21%に達し、年々上昇し続けており、現在の日本の重大政策課題であるとされています。そんな中で私は、少子高齢化率全国一位の秋田県でも、過疎化が進む湯沢市皆瀬地区で生まれ育ちました。一人暮らしの高齢者が多く、周囲に生活を支える若い世代がいないため、大変な思いをして生活している人が大半でした。買い物に行くにしても、病院に行くにしても何キロも離れたところまで苦勞して行ったり、何か緊急事態があった時にすぐに駆け付けることが出来ずに危険な目にあったという人達がたくさんいました。このような状況を目の当たりにして、少しでも多くの方が安心して安全により暮らしやすい生活を送ることができるよう社会の実現に貢献したいと考えました。そこで、過疎地域に暮らす高齢者の困難や課題の解決に、ITや人工知能(AI)が役立ち、生活を豊かにできるのではないかと考え、このテーマを設定しました。

2. 派遣国で調査や観察したこと

今回カナダでは高齢者施設にボランティアとして訪れて、二つの高齢者施設でインタビュー・アンケート調査を実施しました。一つ目の施設は、日本人・日系カナダ人を支援するための高齢者施設である「隣組」。二つ目は主に55歳以上の高齢者のための親睦とレクリエーションを提供している「Oakridge Senior's Center」。アンケート内容としては高齢者の生活に対して感じている不便や食事、病院などについて、またAI・ITサービスを扱えるのかに関して調査をしました。調査で得た情報の中からいくつか抜粋して以下にまとめていきます。まず75歳の女性Aさんは、現在一人暮らしをしていて、AI・ITサービスを上手く使いこなせず生活に苦勞していました。買い物や病院なども全て娘さんに来てもらって任せていました。また急に体調を崩してしまった時や、将来的に孤独死をするのではないかと不安が大きいというお話をしていました。このよう孤独感や将来への不安からスマートフォンなどの機器を使い始めたいという気持ちが強く湧いてきているそうです。また隣組に所属している65歳の男性Bさんは現在一人暮らしをしています。Bさんは日常的にスマートフォンやパソコンを利用して、3年ほど前からこれらの機器を使用するようになったが、自由に扱えるようになるまではかなりの時間がかかったそうです。現在は自分一人でも使うことができているそうです。また病院や生活に関しては全て自分一人で行っています。しかし近くにこれらの施設がないので緊急時にすぐに行くことができないという理由で非常に不便をしていました。また医療面に関して不満があり、カナダでは診察をしてもらうためには、医者をあらかじめ登録しておく必要があります。しかしこの登録には非常に時間がかかる上に変更もしづらいため行きたいところに気軽に行くことができないことに苦勞していました。またカナダの場合では多くの医者はアメリカに行ってしまうため医者の数が足りていないというようなことが問題点として挙げていました。日本でもこれに似た現象が非常に多いです。独居高齢者の孤独死問題や生活に不便を感じているなどの問題は特に地方の過疎地域で顕著と

なっています。地方では多くの人々が都内に行くといった傾向があることや、家族が遠方にいるといったパターンが多いので、見守ることが難しく、体調を崩してもすぐに駆け付けることができない。また病院や買い物ができる場所も遠く、高齢者が一人で生活していくには厳しいことが多いです。カナダは日本に比べてAI・ITといった機器の応用が進んでいるため、これらのAI・ITを用いたサービスが多く場所で利用されています。これによって効率的に進む一方で、これらの問題のように逆に不便に感じている人も多くいました。今後日本がAI・ITの実用化を進めていく上で、他国の取り組みを参考にしていくべきところは多いが、様々な側面から判断していくことが重要であるといえます。

3. 2の結果、考えたこと、日本との比較など

インタビュー・アンケート調査の結果から、独居高齢者の見守りサービスとしてはセンサやロボットを用いたものは適していないと感じました。その理由としては大きく分けて4点あり、一つ目はAI・ITサービスを取り入れることを嫌っている人が多いことです。多くの人達はできる限り今の生活を維持して、変化を避けようとする傾向が非常に強かったです。二つ目は、使用方法が複雑であることです。やはりこれらのサービスは使用方法が複雑で、高齢者の方々にとってはハードルが高くなっていました。三つ目は、教えてくれる人がいないことです。使いたくても使用方法を教えてくれる人も少ないので、そのまま挫折してしまうという方が多かったです。最後は、金銭的に厳しいということです。やはりロボットやセンサを利用した見守りサービスは、コストがかかってしまいどうしても手を出しづらいものになってしまうからです。これらが現在の問題点として挙げられます。これらのことを考慮した上で、安全に独居高齢者を見守ることのできるサービスを提案することが大切だと考えています。

4. 3から、茨城（日本）に提案できること

これらの事から茨城県（日本）に提案できることとしては、スマートフォンを用いた見守りサービスを提案したいと思います。現在採用されている、スマートフォンを使用した見守りサービスでは、家族と高齢者の両方がスマートフォンを所持して、位置情報や異常を知らせるといったサービスなどの非常に限定的で狭い範囲で行われている見守りサービスしか見受けられませんでした。これでは家族が遠方にいる場合や、知らせに気づくことができないといったケースが十分に起こる可能性が高くなってしまいます。そこで、家族のみならず所属している高齢者施設やかかりつけの病院などにも情報を伝えることができる仕組みづくりを構築し、より社会全体で多くの独居高齢者を見守ることができるサービスを生み出すことが現在必要なのではないかと考えています。このような見守りサービスを構築することで、いち早く、緊急事態に気づくことができたり、社会のコミュニティの輪をより強固に作り上げることが可能となります。見守りサービスや高齢者支援のサービスを作成する上で、多くの人と関わりを持てるものであるということは一つ重要な要素であるといえます。このようなサービスの構築が今後の独居高齢者の見守りサービスとしてのあるべき姿ではないでしょうか。こうして高齢者が社会から切り離されず、社会のコミュニティの輪に参加している状態を今後目指していかなければいけません。しかし現状プライバシー管理の点や、実際は事故や体調を崩していないのに知らせが届いてしまうなどの誤作動も多々あるため、これらの諸問題をまずは解決していかなければ上記で述べたような、より多くの人を巻き込んだ見守りサービスを生み出すことは厳しいといえます。また海外と比べて日本は、AIの導入が遅れて

いたり、まだまだ馴染みが薄いため、これらの認識を払拭していく必要があります。この認識を払拭するためには非常に時間がかかるが、まずは高齢者が扱いやすく手を出しやすいものから生活に取り入れていき、段階的に浸透させていく必要があります。ここまで述べてきたように日本は少子高齢化問題、そしてそれに伴って引き起る高齢者の一人暮らしによる孤独死、認知症などの問題は非常に深刻になっています。今もなお日本の高齢化率は年々急激に上昇しており、大きな社会問題となっているため、これらの問題に関して一人一人がより真剣に向き合い、今後の対策を取っていかねばいけません。